二〇一二年九月二六日（参加者一四名）

登り来し棚田の天辺大花野　うつぎ
点々と散らばる谷戸の藁ぼっち　〃
秋山に影落とし行く羊雲　〃
句を拾ひ栗も拾ひつ能勢山路　〃
大花野園丁帽の見え隠れ　〃
ラベンダー唄ひやまずよ風の園　菜々
秋の水天使の掲ぐ盤あふれ　〃
秋日濃し残念石のくさび址　〃
萩しだれ瑠璃の池面にふれんとす　〃
秋日傘池畔の小径たもとほり　〃
ジーパンにサイケ模様や草じらみ　きづな
存問のごと屈み見る秋千草　〃
さざ波のダイヤ光りす秋の湖　〃
日の温みある岩に座し秋を聴く　〃
漣の池に佇む秋日傘　こすもす
句仇の松茸弁当匂ひけり　〃
植物園事務所を覆う蔦葛　〃
墨池のほとりを染める曼珠沙華　せいじ
道をしへ右と左に別れけり　〃
猪除けのフェンスを越えて吟行す　〃
草じらみつけてファッションさながらに　満天
身に入むや残念石に穴ふたつ　〃
道をしへ誘ふ径に従ひぬ　〃
苔むせる岩を洗ひて水澄める　わかば
脊高の紫苑は風に傾ぎけり　〃
石垣のなぞへに立ちし彼岸花　ぽんこ
薄の穂風に伏しては立ち上がる　〃
一水に沿ひて燃えゐる曼珠沙華　有香
柿紅葉同じ模様はなかりけり　〃
水音に和して揺れゐる秋の草　よう子
毬栗の転がり出でし車道かな　〃
推敲す白きベンチの風は秋　百合
かく長きまつげの欲しや曼珠沙華　はく子
斑猫を遠まきにして吟行子　〃
草じらみ幾何学模様描きけり　〃
池の辺のあちこちに佇つ秋思人　〃
茶室へと水引草の小径かな　〃

定例句会みのる選

二〇一二年九月二六日（参加者一四名）